

# 70年と大学問題

- 60年後半の学生運動は、70年の激動期をむかえて新たな局面を展開しつつある。大学斗争を直接革命運動として日帝打倒へと結びさせ、さもなくば個別改良斗争として、学内問題を70年安保・政府打倒の政治計画に組み込んでゆく。現在各大学で突きつけられた問題は、かかる政党派性を媒介に、党派拡大の各派の動きに吸収されて行くのである。
- 党派を否定し、組織拡大の自己目的追求を拒否した地点に斗争を出発させた全共斗も6.15集会に於て自己の大学の封鎖期間を斗争実績の唯一の基準として示すに到って、その政治主義的醜悪性をあますところなく暴露した。
- 戦略を背後に抱えた運動は、現実の斗争の過程で戦術的要請を生む戦術をめぐる曾なみは政治である。体制の構造的転換を戦略とする左翼学生運動より演繹される戦術はその多様性のなかで学園斗争をその重要な一つとしてがえる。かかる腐敗を打ち切る道は戦略に変えるビジョンを、戦術に変える肉のかけを持つ行為により切り開かなければならぬ。
- 学園で日共の腐臭にもせび、トロツキの残黨に恐怖する凡ての学園人は、今こそ自己の声を主張を連体と団結にまで高める作業を持たねばならぬまい。未だ共産主義との誤りを運動に於て声明しえない全学連諸派を乗り越える斗争は、我々の発言と思考と行動による第三勢力の創出である。一般学生であることは沈黙と無感心と怠惰の象徴ではない。又既成派閥への挑戦は自らを思想的無党派へ押し込めることを意味しない(而して地點に逃避させる意味はない)。
- 東大の混迷の一年間が生み出したものは、日共三富露骨暴露の東大構内への一層の露骨化であった。又日大で斗われた抵抗の武装化は鎮圧の武装化の反作用を生み、ここに何の解決を見出せぬまま一年間を費やした紛争のエネルギーは反日共諸派の実力部隊を育生し、かうじて下火をとどめていた。
- 70年の激動は首領歩みを開始した。70年が準備された危機といえ沈黙と無感心がその準備に有利な条件を添えている現実を多くの学友は学園内に於ける姿に見い出さねばならぬ。
- 最近大学立法が問題とされてい、此の立法の出現はその背景に全治中の星條という腐敗を確かに持つている。然し法秩序である。尽くせぬ現実を勘へ歴史は階々と積み上げて来たのだ。国民の意志を踏みにじり自己性の抑圧の上に登場した日本国憲法、日米安保条約は戦後社会に埋めがたい亂政を与えた。米占領軍の政策意図の中にあつた民主主義の不消化余症は権利と合理の重視のもとに日本固有の正直を遠く退散した。我々が大学を問題とし70年を語る時同時にかかる戦後の宿命からの脱出を試みねばならぬ。

日本学生同盟明大支部 連絡先 (264)7031